



間奏曲

12月13日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

12月13日のおはなし「間奏曲」

クリスマスの日
ニューヨークに
放射性降下物を
まき散らす計画がある。

統合参謀本部のレポートが国家情報長官に提出されたのは12月25日当日の朝だった。ただちに大統領、副大統領、国務長官、国防長官、統合参謀本部議長、中央情報長官のミーティングが行われた。ミーティングといっても実際に同じテーブルに着いたのは副大統領と国務長官、そして統合参謀本部議長の3人だけで、あとはみなテレビ会議での参加だった。

「遅いんだよ」エアフォースワン機上から大統領が言った。「遅すぎるんだよ。クリスマスっていたら今日じゃないか」

「ニューヨークなのは」大統領首席補佐官が横から口を挟んだ。「間違いないのか」

「そうだ」大統領は質問した。「ニューヨークなのは間違いないのか」

「99%」中央情報長官、つまりCIA長官が答えた。「間違いありません」

「ツインタワーの前にもお前らは」大統領が吼えた。「99%問題ありませんと言ったぞ」

「ホワイト・クリスマスならぬグレイ・クリスマスってわけだ」副大統領が呟いた。「あ、いまのは放射線量の単位の“グレイ”ってのとかけたんだけどね」

「大統領閣下」全く取り合わずに統合参謀本部議長が言った。「ニューヨークかテキサス、どちらかだと見ています」

「なぜだ？」言葉を失った大統領の代わりに首席補佐官が尋ねた。「テキサスなんていままで一言も言わなかったじゃないか」

「先ほどわかった作戦コードネームが」統合参謀本部議長が答えた。「『砂漠に降る雪』というもののなのです」

「アラスカだ」大統領が重々しく言った。「アラスカに向かえと機長に伝え……」

「大統領閣下」首席補佐官がさえぎった。「緊急事態宣言をまず」

「そうだ」大統領が言った。「緊急事態せ……」

「待ってください」国防長官が言った。「いまのが悪いニュースだとすると、いいニュースもあるんです」

「聞こう」大統領が身を乗り出した。「捕まえたのか、あいつを」

「いいえ」大統領が失望のため息をつくのを見て国防長官は慌てて続けた。「しかし行方不明になっているようです」

「行方不明だって？」副大統領は馬鹿にした口調で呟いた。「我が国の情報機関にとって、あいつはこの5年ずーっと行方不明だったんじゃないのかな」

「違うんです。そうじゃなく」国防長官は顔を赤くして言った。「彼らの組織の中で、所在不明、つまり指揮系統から姿を消してしまっただけです。やつらはいま頭を失った状態です」

* * *

「ちょうどアメリカ合衆国のようにな」サミュエルおじさんは言って、くっくくと笑った。「馬鹿な奴らだ。人がせっかく用意したクリスマス・プレゼントを素直に受けとめられずに泡食ってやがる」

岩の上のピューマはその笑い声を聞いてうっすら目を開け、ちらっと見てからまた目を閉じた。サミュエルおじさんは立ち上がると、紅白ストライプのズボンから砂を払い、紺色のジャケットの襟を直し、星形があらわれたシルクハットをぼんと叩いて形を整えた。何か言いたげに眉毛を上下させ、白い顎髭をしごいたが、結局何も言わずに岩場を離れた。離れる前に足元のコーチのトートバッグから着物を取り出し、しばし眺めた。やがてふんと鼻を鳴らし、ピューマの目の前にその紫色の衣裳を置いた。ピューマがいきなり目を開け喉の奥で唸り声を上げたので、

サミュエルおじさんは30cmほど飛びすさった。

それだけだった。立ち去る派手な星形模様のシルクハットを見送りながら、数頭のピューマが姿を現し寝そべるピューマを取り囲んだ。紫色の着物はたちまち頭数分に増え、着物をまとったピューマは人の姿に変わった。「どうして貝紫を使わせた?」「土地を守るためか?」「あの傲慢な男と手を組むのか?」後から現れたピューマたちは次々に問いを発した。最初からいたピューマは人の姿を取ることなく、そのままの姿で着物をくわえ、洞窟に向かった。「どうしてあいつを日本人にしたんだ? 何か意味があるのか?」

司令室では副大統領が大きくあくびをし、サミュエルおじさんの声に耳を傾ける。一頭のピューマが紫の布をなびかせながら南をめざしひた走る。中央アジアの地下壕生活と日本での恵まれた生活を交換した男は蛇の抜け殻を拾い、お守りとして身につける。

(「貝紫」 ordered by たけちゃん-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

間奏曲

<http://p.booklog.jp/book/40427>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40427>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40427>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.